

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 親の養育態度と子どもの行動傾向に関する基礎研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学共同参画研究所 公開日: 2021-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荻田, 純久, OGITA, Yoshihisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/978">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/978</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 親の養育態度と子どもの 行動傾向に関する基礎研究

萩 田 純 久

## 問題と目的

### 子育て

人間の発達の規定要因として遺伝と環境の相互作用が重要であることは周知の事実である。その環境要因の一つとして、親の養育態度が考えられる。子どもは早ければ胎児期から周囲のさまざまな人からの影響を受け、同時に周囲の人への影響を与えている存在であると言える。とりわけ、親と子どもが織りなす相互作用は、良きにつけ悪きにつけ、お互いにさまざまな影響を及ぼし合う。親、子どもにはそれぞれの気質、性格があり、親の子育て方法、それに対する子どもの反応もさまざまである。子育て方法には国や文化による差異、時代による差異などもみられるのかもしれない。例えば、Lee他（2014）<sup>1)</sup>は虐待型育児（harsh parenting）ということばを使っている。これは、子どもに大声で怒鳴ったり、平手打ちをしたりといった感情的なしつけが該当し、虐待の危険因子だと述べている。この虐待型育児の内容は、現在の日本では虐待に相当すると思われるが、Lee他（2014）<sup>1)</sup>は虐待とは区別している。

現在、「児童虐待の防止等に関する法律」の第14条において「児童の親権を行う者は、児童のしつけに際して、体罰を加えることその他民法（明治二十九年法律第八十九号）第八百二十条の規定による監護及び教育に必要な範囲を超える行為により当該児童を懲戒してはならず、当該児童の親権の適切な行使に配慮しなければならない。」と明記されており、仮に「しつけ」の一環だとしても体罰をしてはならないということが明確に打ち出されている。かなり昔に筆者が保育者を対象とした研修会で体罰はいけないという話をしたところ、流石に保育現場ではしないが、自分の子育てであれば体罰を使っているという方が散見された。2009年に実施されている母親を対象とした調査報告では、75.8%に「感情的な八つ当たり」、55.5%に「頭をたたく」、43.7%に「傷つける暴言をいう」などの養育態度がみられた<sup>2)</sup>ことから考えれば、決して驚くような状況ではなかったのかもしれない。その他にスポーツの指導において体罰が行われたと

いう話も昔であれば時々聞いたことがある。体罰に対する認識が昔と今とでは異なるのは恐らく間違いないだろう。

体罰等の悪影響に関しては、脳科学的にも実証されてきている。厳格な体罰（頬への平手打ちなど）を長期かつ継続的に受けた人たちの脳の右前頭前野内側部（感情や思考をコントロール）、右前帯状回（集中力、意思決定、共感に関与）などの容積減少が報告されている<sup>3)</sup>。暴言虐待（言葉による虐待）を受けた子どもたちは、聴覚野（スピーチ、言語、コミュニケーションに関与）の容積が増加していることが報告されており、その程度は暴言が深刻であるほど影響が大きいことが分かっている<sup>3)</sup>。現在であれば、上記のように法律上で明記され、しかも脳科学的に体罰等が問題であることが示されているため、子育てや指導法も徐々に変わってきていると信じたい。

### 養育態度に関する研究

これまで親の養育態度に関する研究は、さまざまな観点から展開されてきた。Bowlbyにより提唱されたアタッチメント理論において、子どもが安定したアタッチメントを形成するためには、養育者が子どもの発する情動的シグナルを適切に解釈し、応答することが重要である<sup>4)</sup>。こうした安定したアタッチメント形成を左右する養育者の特徴として感性（Sensitivity）と応答性（Responsiveness）が考えられている<sup>5)</sup>。感性は子どもの視点に立って物事をみるという態度を基本とし<sup>6)</sup>、子どもに対する共感的態度が考慮されている<sup>4)</sup>。近年の研究では、感性の派生概念として内省機能、洞察機能、心を気遣う傾向、情緒的利用可能性などが考えられており、これらに関しては篠原（2015）<sup>6)</sup>が詳細なレビューを行っている。母親の感性の低さと乳児期の乏しい感情制御能力との関連も指摘されており<sup>7)</sup>、子どもが自分の感情制御を行えるように育てるためには、子どもの気持ちへの共感が重要だと言える。応答に関しては、母親が乳児の内的状態を共感的に迫り、その情動についてのフィードバックを行う調律的応答は内的作業モデルが安定型の母親が行う傾向があるという報告があり<sup>4)</sup>、アタッチメントの世代間伝達<sup>8)</sup>を裏付ける研究と言える。

Baumrindは、子どもへの応答性および統制（あるいは要求性）に基づいて、3つの養育態度を考えている<sup>9) 10) 11)</sup>。具体的には、許容的（Permissive）、権威主義的（Authoritarian）、権威的（Authoritative）の3つである<sup>12)</sup>。さらにMaccoby他（1983）<sup>13)</sup>は許容的を過保護型（indulgent）とネグレクト型（neglectful）に分類しており、この分類はLamborn他（1991）<sup>14)</sup>の研究により支持されている（図1）。

権威的態度は、子どもへの成熟の要求やしつけに関する基準を持ち、子どもとのコミュニケー

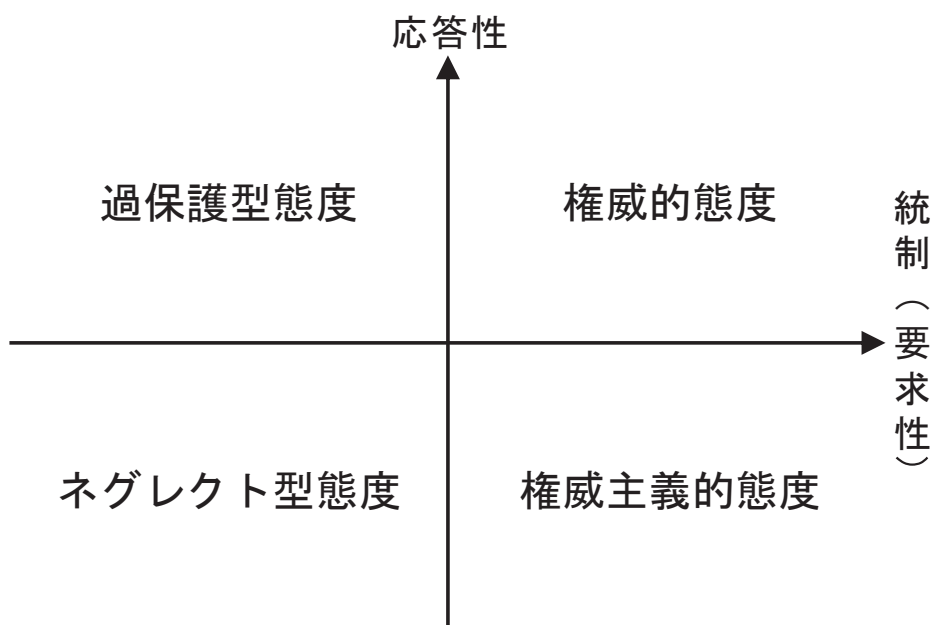


図1 養育態度の分類

ションを重視する<sup>15)</sup>。子どもに対する統制的な養育態度は親のネガティブな性格特性（気分の変化大、非協調性など）と関連しているという指摘がある<sup>16)</sup>。また、子育てにおいて、親の罰が厳しい場合、子どもの攻撃的傾向（他人を傷つける行動で、身体的なものおよび言語的なものの双方を含む）は強くなる<sup>17)</sup>。こうしてみると統制的な側面を持つ権威的態度は、ネガティブな影響を子どもに与えてしまうのではないかと思える。しかし、権威的な母親を持つ子どもには喧嘩などを避けようとする傾向や主張性がみられ<sup>18)</sup>、権威的な母親に育てられたと回想する大学生は他の養育態度の母親に育てられたと回想する大学生よりもアイデンティティが統合寄りになっていた<sup>15)</sup>ように、権威的態度は子どもに対してポジティブな影響を及ぼしうる。その鍵を握っているのは、子どもとのコミュニケーションだと思われる。子どもの行動が他者に与える影響を説明したり、説得したりすると愛他行動の社会化が促進される<sup>19)</sup>。また、養育者が受容的、指導的態度を持ち合わせていると、子どもの向社会性の水準が高い<sup>20)</sup>。このように、養育者が子育ての方針、基準などを持っていても、それらを押し付けることなく、子どもとの対話の中で、子どもが理解できるような説明をしっかりと行うことにより、子どものさまざまな発達が保障されるのであろう。

権威主義的態度は、しつけに関する基準などを持っているが、子どもとのコミュニケーションは重視せず、独裁的に判断する傾向がある<sup>15)</sup>。Fromm (1941)<sup>21)</sup>は、ナチに追随していった

人たちに共通して内在する、あるパーソナリティ体系を指摘し、権威主義的パーソナリティと呼んだ。そして、Adorno他（1950）<sup>22)</sup>は、反社会的な宣伝に影響されやすいと思われるような思考構造をもつ人に共通するパーソナリティ特性について言及し、これを権威主義的パーソナリティとして類型化を行った。ここでいう権威主義は、政治的イデオロギーや偏見と密接に関連した概念であるため<sup>23)</sup>、より一般化された権威主義としてRokeach他（1956）<sup>24)</sup>は独断主義を考え、信念という認知体系から理論化を行った。

Adornoは偏見的な者の生育歴の特徴として、家庭での厳しいしつけと忍耐や受容的態度の欠如、父親の過剰な厳格さ、子どもの側での恐怖感と親への表面的同調や依存などを指摘しており<sup>25)</sup>、これは権威主義的態度による子育てと符合する。偏見的な者、つまり権威主義的な者は、子ども時代に権威主義的態度で育てられ、自分自身も権威主義的な人間となっているというのである。権威主義的な傾向をもった者が今度は自分の子どもを権威主義的態度で育てる可能性もあり、上記の指摘はアタッチメントの世代間伝達<sup>8)</sup>のように権威主義的態度の世代間伝達が生じる可能性を示唆している。これに関連する知見としては、荒木（2003）<sup>26)</sup>が母親のしつけが厳しいと権威主義的攻撃性（既存の枠組みに従わない人を攻撃しようとする傾向）を身にまとうようになり、さらに父親の身体的虐待が加わると身体的虐待が世代間伝達する可能性が高くなると述べており、権威主義的態度および虐待といった複数の事柄が同時に世代間伝達する可能性について環境要因に注目して考察している。親子間の偏見の関連を調べた研究では、子どもの偏見と実際の親の偏見とは相関は低かったものの、子どもの偏見と子どもから認知された親の偏見の間には有意な相関が認められ、子どもの認知という観点が重要であることが示されている<sup>27)</sup>。一方、敷島他（2008）<sup>28)</sup>が行動遺伝学の観点から権威主義的傾向の伝達媒介要因を調べたところ、専ら遺伝により伝達されるという結果が得られた。このように権威主義の世代間伝達に関しては、統一見解が得られていない状況であるものの、権威主義傾向のあるものが応答性や受容を重視した子育てが出来るようになれば、権威主義的態度の問題は解決するはずである。例えば、絵本を介して母子が楽しい時間を共有する「絵本共有」によって、母親の子どもに対する敏感な働きかけが増加する<sup>29)</sup>。養育者が子育て支援を利用する中でこうした時間を過ごすことにより、子どもとの関わり方が変容していくことも考えられる。また、独断主義的認知傾向が高い者ほど不安が高い<sup>23)</sup>など、権威主義的傾向はネガティブな性格特性と関連がある<sup>16)</sup>ため、不安をはじめとするネガティブな性格特性に焦点を当てた支援を行うことで、よりよい子育てが行えるようになると思われる。さらに、応答性および統制（あるいは要求性）に影響を及ぼす要因として、生き甲斐や協調性が考えられており<sup>30)</sup>、こうした点も支援プログラムを検討する上で考慮していくべきであろう。今後は、子育て支援、養育者の不安等

に対する支援プログラムを一層、充実させていくことが重要だと思われる。

過保護型態度は子どもとのコミュニケーションを重視しているものの、子どもへの成熟の要求やしつけに関する基準を持っていない。子どもの自主性を尊重し過ぎるために、そのコミュニケーションは教育や指導の側面を持ち合わせていないのである。過保護・過干渉な養育態度により、子どもは強迫性格が形成されやすい<sup>31)</sup>。一方、過保護な養育態度は外的適応を過剰にさせ、内的適応を低下させるため、過剰適応を促進する<sup>32)</sup>。さらに養育者が過保護である児童生徒はいじめ被害の経験が多い<sup>33)</sup>など、過保護型養育態度がもたらすさまざまな悪影響が報告されている。

最後に、ネグレクト型態度は子どもとのコミュニケーションをとろうとはせず、子どもの成熟への要求やしつけもないものである。ネグレクト型態度という名称ではあるが、これが即、虐待の一類型であるネグレクトとなる訳ではない。勿論、程度が強くなればネグレクトに該当するようにはなるが、子どもとのコミュニケーションや成熟への要求、しつけに対して、あまり関心がない、あるいは関わりたくないという状態であると考えればよいだろう。トイレトレーニングがネグレクトの誘因となる可能性が指摘されている<sup>34)</sup>。排泄の自立の早さの時期が気になったり、養育者の思うようにできない場合は苛立ちを感じてしまったりなど育児困難感を高めてしまい、不適切な対処行動に繋がってしまうのである<sup>35)</sup>。こうした子育て上の出来事がネグレクト型態度を誘発することも十分に考えられる。

1つの性格の類型論によって性格の全貌を表現できる訳ではないと同様に、これまで見てきた4つの養育態度によって養育態度の全貌を明らかにできる訳ではない。しかし、この4つの養育態度を軸に据えた養育態度と子どもの行動特性との関連を探る試みは、有意義なものであると思われる。

## 本研究の目的

母親の育児態度と子どもの行動特性の関連を調べ、子育て支援の方策を検討する上での基礎資料とすることを目的とする。なお、子どもの行動特性を調べる際には、世界の多くの国々で使用されているASEBA (Achenbach System of Empirically Based Assessment : 実証に基づくAchenbachの評価システム) を使用することで、今後、海外との比較研究も容易になると思われる。こうしたグローバルな観点で、日本における子育て支援を検討していくためのデータを蓄積していくものとする。

## 方法

### 調査時期

2019年12月上旬から2020年1月下旬にかけて実施した。

### 調査方法と対象者

関西圏の幼稚園（3園）に通う幼児の養育者を対象とした。各園に人数分の調査用紙と返信用封筒を送付し、担当教諭から配布してもらった。母親もしくは父親が自らの養育態度および子どもの行動について回答した後に、返信用封筒に調査用紙を入れ、投函してもらった。回答者は138名であったが、未記入項目があるものを削除し、回答者123名（うち、父親3名、母親120名）となった。父親と母親の比率が極端に異なるため、本研究では母親120名のデータを分析対象とした。子どもの年齢は3歳児19名（男12、女7）、4歳児41名（男22、女19）、5歳児32名（男15、女17）、6歳児28名（男13、女15）であった。

### 調査内容

子どもの行動調査 船曳他（2017）<sup>36)</sup> が作成した2000年度版CBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5の日本語版を使用した。このCBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5は、ASEBA（Achenbach System of Empirically Based Assessment：実証に基づくAchenbachの評価システム）に含まれるものである。ASEBAには、幼児および学齢児用のCBCL（Child Behavior Check List）シリーズと成人および高齢者用のABCL（Adult Behavior Check List）シリーズがあり<sup>36)</sup>、本研究で使ったCBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5は、1歳半から5歳就学前までを対象とした行動チェックリストである。子どもの行動をチェックする尺度はさまざまなものが作成されているが、このCBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5を含むCBCLシリーズはさまざまな国で翻訳され用いられているため<sup>37)</sup>、国際比較も行うことができ、今後、子どもの行動傾向を研究していく際には軸に据えるべきものだと思う。CBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5は、「情緒反応」（9項目）、「不安／抑うつ」（8項目）、「身体愁訴」（11項目）、「引きこもり」（8項目）、「睡眠の問題」（7項目）、「注意の問題」（7項目）、「攻撃的行動」（19項目）、「その他」（33項目）の合計100項目から成り立っている。さらに「情緒反応」、「不安／抑うつ」、「身体愁訴」、「引きこもり」で「内向尺度」、「注意の問題」、「攻撃的行動」で「外向尺度」として考えている。各項目において、「あてはまらない」（0点）、「ややまたはときどきあてはまる」（1点）、「たいへんまたはよくあてはまる」（2点）から回答することになっている。項目100「これまでにあげられていないお子さんの問題をお書き下さい」に関しては記述のみで回答を求めるものであったので、記述がある場合は1点と

したが、「特になし」など問題がないという趣旨の記述があった場合は0点とした。

元来CBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5は、1歳半から5歳の就学前の子どもを対象とした行動チェックリストであり、幼稚園年長クラスの6歳児の場合は学齢児用のCBCL/6-18を用いるべきである。この辺りは就学時期が日本とは異なるために生じる問題だと思われる。本研究では日本の幼稚園に在園している子どもたちの年齢差を比較するため、子どもが誕生日を迎え、6歳になっている場合であってもCBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5での回答をお願いした。

**親の養育態度調査** 中道他 (2003)<sup>12)</sup> が作成した親の養育態度尺度を使用した。これはRobinson他 (1995)<sup>38)</sup> が作成した親の養育行動を測定する項目を基に、独自に作成したものである。子どもに対する応答性に関する8項目 (以下、応答性とする)、子どもに対する統制に関する8項目 (以下、統制とする) から成り立っている (内、3項目は逆転項目)。回答は「1. ぜんぜんあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. だいたいあてはまる」、「4. ぴったりあてはまる」の4段階評定で求めた。

## 分析

分析には、IBM SPSS Statistics 26を用いた。

## 結果

### 子どもの行動傾向

3歳児19名 (男12、女7)、4歳児41名 (男22、女19)、5歳児32名 (男15、女17)、6歳児28名 (男13、女15) における各症状群尺度、内向尺度、外向尺度、全問題尺度の平均値、標準偏差は表1のとおりであった。各症状群尺度、内向尺度、外向尺度、全問題尺度の全ての尺度を従属変数とし、年齢と性別を独立変数とした2要因の分散分析 (年齢×性別) を実施した。その結果、全ての尺度において年齢、性別の主効果、それらの交互作用は5%水準で有意なF値は得られなかった (表1)。



表1 CBCL/1 1/2-5の症状群尺度、内向尺度、外向尺度、全問題尺度の平均値、標準偏差と分散分析の結果

	3歳		4歳		5歳		6歳		交互作用 $\eta^2_p$	主効果 (年齢) $\eta^2_p$	主効果 (性別) $\eta^2_p$			
	男	女	男	女	男	女	男	女						
	(n=12)	(n=7)	(n=22)	(n=19)	(n=15)	(n=17)	(n=13)	(n=15)						
情緒反応	2.00 (2.13)	1.43 (1.40)	1.73 (1.91)	1.47 (2.25)	1.20 (1.42)	1.29 (1.53)	1.15 (1.07)	0.80 (1.01)	0.17	.01	1.05	.03	0.69	.01
不安/抑うつ	1.92 (1.78)	2.86 (2.27)	2.14 (2.10)	2.68 (3.32)	1.67 (1.59)	2.06 (1.98)	2.46 (2.07)	2.47 (2.03)	0.17	.01	0.49	.01	1.19	.01
身体愁訴	1.42 (1.56)	1.00 (0.82)	0.59 (0.91)	1.42 (2.27)	0.87 (0.99)	0.18 (0.39)	1.08 (1.98)	0.67 (0.72)	2.24	.06	1.17	.03	0.42	.00
引きこもり	1.42 (1.38)	1.43 (1.40)	0.55 (0.80)	0.89 (1.63)	0.40 (0.63)	0.71 (0.99)	0.62 (1.19)	0.80 (1.15)	0.10	.00	2.29	.06	0.91	.01
睡眠の問題	2.42 (2.19)	1.14 (1.07)	2.45 (1.92)	1.84 (1.57)	1.60 (1.24)	2.12 (1.58)	1.62 (1.26)	1.73 (1.34)	1.51	.04	0.55	.02	1.03	.01
注意の問題	2.17 (2.41)	1.29 (1.38)	1.27 (1.67)	1.11 (1.20)	1.33 (1.54)	1.18 (1.91)	1.31 (1.38)	1.53 (1.77)	0.39	.01	0.47	.01	0.57	.01
攻撃的行動	8.92 (6.54)	6.29 (3.73)	6.27 (6.32)	5.11 (4.45)	4.27 (4.74)	4.35 (6.84)	4.46 (4.27)	5.07 (5.41)	0.38	.01	1.50	.04	0.53	.01
その他	7.08 (3.68)	8.14 (3.81)	5.77 (4.38)	6.53 (6.51)	5.60 (4.32)	4.94 (4.58)	5.31 (3.59)	5.40 (4.66)	0.19	.01	1.14	.03	0.12	.00
内向尺度	6.75 (5.07)	6.71 (4.68)	5.00 (4.63)	6.47 (7.63)	4.13 (3.83)	4.24 (4.19)	5.31 (4.35)	4.73 (3.33)	0.27	.01	1.15	.03	0.06	.00
外向尺度	11.08 (7.53)	7.57 (4.35)	7.55 (7.58)	6.21 (5.19)	5.60 (6.13)	5.53 (8.44)	5.77 (4.87)	6.60 (6.94)	0.43	.01	1.27	.03	0.62	.01
全問題尺度	27.33 (15.72)	23.57 (10.61)	20.77 (15.76)	21.05 (19.46)	16.93 (14.11)	16.82 (17.20)	18.00 (12.04)	18.47 (14.02)	0.08	.00	1.30	.03	0.07	.00

注) ( ) は標準偏差を示す。

## 母親の養育態度と子どもの行動傾向

中道他 (2003)<sup>12)</sup> の採点方法に基づき、16項目について「ぜんぜんあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「だいたいあてはまる」、「ぴったりあてはまる」の順に1から4点を与えた。ただし、3項目の逆転項目に関しては、4から1点を与えた。応答性、統制ともに合計点を算出した後に、各々の項目数である8で除したものを各因子の得点とした。その結果、応答性と統制の平均値は各々3.14 (SD 0.35)、3.46 (SD 0.31) であった。また中央値は各々3.13、3.50であった。

こうして得られた応答性得点と制御得点を用いて、養育態度を分類した。中道他 (2003)<sup>12)</sup> は、Baumrind (1967)<sup>10)</sup> の養育態度の分類法を軸にすえ、応答性得点と制御得点の平均値を用いて養育態度の分類を行った。ただし、許容的態度の分類法に関しては不明瞭な記載があるように思われたため、中道他 (2003)<sup>12)</sup> の分類を再現することが難しいと判断した。そのため、本研究では平均値ではなく中央値を用い、なおかつ可能な限りBaumrind (1966)<sup>9)</sup> の養育態度の分類法に基づいた分類を試みた。具体的には、応答性得点が中央値より大きく、かつ統制得点が中央値よりも大きい場合を権威的態度、応答性得点が中央値以下、かつ統制得点が中央値よりも大きい場合を権威主義的態度、応答性得点が中央値より大きく、かつ統制得点が中央値以下の場合を過保護型態度、応答性得点が中央値以下、かつ制御得点も中央値以下をネグレクト型態度とした。その結果、権威的態度21名、権威主義的態度25名、過保護型態度37名、ネグレクト型態度37名となった。養育態度ごとの子どもの行動傾向の平均値、標準偏差は表2のとおりであった。

続いて、母親の養育態度と子どもの行動傾向の関連を調べるために、各症状群尺度、内向尺度、外向尺度、全問題尺度を従属変数とし、母親の養育態度を独立変数として一元配置分散分析を実施した。その結果、注意の問題、攻撃的傾向、外向尺度において有意なF値が得られた (表2)。そこでGames-Howellによる多重比較を行ったところ、注意の問題においては権威的態度と権威主義的態度、権威的態度とネグレクト型態度の間に有意差がみられた。攻撃的行動においては、過保護型態度と権威主義的態度、過保護型態度とネグレクト型態度の間に有意差がみられた。最後に外向尺度においては、過保護型態度と権威主義的態度、過保護型態度とネグレクト型態度の間に有意差がみられた。

表2 各養育態度ごとの症状尺度、内向尺度、外向尺度、全問題尺度の平均値、標準偏差と分散分析の結果

	権威的態度 (n=21)	権威主義的態 度 (n=25)	過保護型 態度 (n=37)	ネグレクト型 態度 (n=37)	F値	$\eta^2$	多重比較 (Games-Howell)
情緒反応	1.00 (1.14)	1.72 (1.82)	1.08 (1.53)	1.70 (1.93)	1.56	.04	
不安/抑うつ	2.05 (1.75)	2.64 (1.47)	2.05 (2.13)	2.30 (2.87)	0.42	.01	
身体愁訴	1.05 (2.40)	1.04 (1.21)	0.62 (0.89)	0.89 (1.17)	0.62	.02	
引きこもり	0.24 (0.44)	1.08 (0.95)	0.70 (1.08)	0.97 (1.54)	2.54	.06	
睡眠の問題	2.00 (1.52)	1.84 (1.28)	1.84 (1.59)	2.08 (1.88)	0.19	.00	
注意の問題	0.48 (0.93)	1.80 (1.41)	1.08 (1.38)	1.86 (2.11)	4.41	.10	権威的態度<権威主義的態度、権威的態度<ネグレクト型態度
攻撃的行動	(5.93)	4.71 (5.32)	3.46 (4.29)	6.92 (6.06)	3.42	.08	過保護型態度<権威主義的態度、過保護型態度<ネグレクト型態度
その他	4.57 (3.01)	6.84 (3.26)	5.51 (4.81)	6.49 (5.76)	1.21	.03	
内向尺度	4.33 (4.08)	6.48 (4.17)	4.46 (4.46)	5.86 (6.08)	1.28	.03	
外向尺度	5.19 (6.64)	8.80 (6.21)	4.54 (5.29)	8.78 (7.56)	3.88	.09	過保護型態度<権威主義的態度、過保護型態度<ネグレクト型態度
全問題尺度	16.10 (12.32)	23.96 (11.92)	16.35 (14.38)	23.22 (19.10)	2.27	.06	

注) ( ) は標準偏差を示す。

## 考察

### 子どもの行動傾向の年齢差と性差

船曳他（2017）<sup>36)</sup>の研究では、女兒に比べ、多くの尺度で男児の影響が強く、年齢群でも影響の違いがみられた。しかし、本研究は分析手法が異なるが、子どもの行動傾向には年齢差、性差がみられなかった。この結果の違いに関しては、今後の検討課題としたい。

### 母親の養育態度と注意の問題

注意の問題は、権威的態度が最も低く、権威主義的態度、ネグレクト型態度が高い傾向がみられた。権威主義的態度、ネグレクト型態度に共通する点は、低い応答性である。ネグレクト群は被虐待体験のない群よりも外向尺度（注意の問題および攻撃的行動の合計点）の得点が高いという報告もあるため<sup>39)</sup>、ネグレクト型態度が原因で注意の問題が生じたと考えられることができる。一方、子どもの注意の問題が多くみられると激しく叱責するなどして自分の決めた基準通りに行動させようとする（権威主義的態度）。あるいは、出来るだけ関与しないようにする（ネグレクト型態度）といった状態も考えられる。

ADHD傾向の子どもの母親は障害を理解しているものの、子どもに肯定的感情を抱き、あたたかい態度で接したいのに、現実はそのできていないと認識していると報告がある<sup>40)</sup>。実際にADHD傾向が高いと「肯定的働きかけ」は低く、「叱責」が高い傾向がみられている<sup>41)</sup>。現在では、発達障害に関する書籍やインターネットによる情報は豊富である。また、様々な支援を行う専門機関も充実してきている。それ故に、発達障害の子どもの養育者は、知識は充実してきていると思われる。しかし、実際に肯定的感情を抱いて関わることの困難さを実感しているのが現実なのだと思う。

### 母親の養育態度と攻撃的行動

攻撃的行動は、過保護型態度が最も低く、権威主義的態度、ネグレクト型態度が高い傾向がみられた。権威主義的態度、ネグレクト型態度が高い傾向がみられたのは、注意の問題と同じであり、やはり低い応答性について検討する必要があると思われる。

調律的応答は子どもの共感性の発達に寄与する可能性がある<sup>4)</sup>。そして、共感性は他者志向的な向社会的行動に結びつき、攻撃性を抑制するための役割を果たす可能性がある<sup>42)</sup>。調律的応答には共感性が不可欠であるが、養育者の共感性は養育者独自の要因である。小原（2005）<sup>43)</sup>が指摘しているように、1歳児の子育て時には0歳児の子育て時とは異なり、情動共感性が情

緒応答性における感情の読み取りに及ぼす影響が低い。ちなみに情緒応答性は、養育者と子どもの相互作用に基づく概念であり、相互のやりとりの中で情緒表現に気づき、共感することと自らの情緒を表現することが該当する。この指摘は育児経験の積み重ねに起因するものと思われるが、仮に共感性が特に優れている訳ではなくとも、子どもとの関わりを楽しみながら、時に楽しめないことがあったとしてもとにかく地道にコミュニケーションを継続することで、応答性が高まっていく可能性があることを示していると思われる。全ての養育者が共感性において特に優れている訳ではない。しかし、養育者と子どものコミュニケーションが継続できるように支援していくことにより、養育者の情緒応答性を高め、子どもたちの共感性を高め、そして攻撃性を抑制することができるのではないだろうか。

「心の理論」を獲得すると対人葛藤場面における対処行動として、攻撃的方法の選択が減少し、自己抑制的方法が増加すると言われている<sup>44)</sup>。養育者の応答性と子どもの「心の理論」に関する研究の中で、母親の強圧的応答は「心の理論」の発達を促進することには繋がらない<sup>45)</sup>というものがある。応答性が高くともネガティブな応答であれば、「心の理論」の発達は促進されないということである。また、応答が明確なものであれば問題ないが、日本に多く見られる「あいまいな養育態度」（言葉による指示があいまいであったり、一時的に言語による指示を控えることにより、意図が明確に伝わりにくい養育態度）は他者理解の発達を促進し難い<sup>46)</sup>。「心の理論」の獲得、他者理解の発達を促すためには、強圧的応答ではなく、あたたかさが伝わるようなポジティブな応答を、不明瞭なことばがけではなく、明確で具体的なことばがけを重視すべきである。

以上の他、子どもの攻撃的行動の獲得に関しては、親が体罰を行っているなど攻撃的行動のモデルが存在していること、攻撃的行動に対して親が寛大であることが影響しているという見解がある<sup>47)</sup>。また、ネグレクト群は被虐待体験のない群よりも外向尺度（注意の問題および攻撃的行動の合計点）の得点が高いという報告もある<sup>39)</sup>。親自身の攻撃的行動、ネグレクト、親が他者の攻撃的行動を容認することも避けたいところである。

## おわりに

本研究では、母親の養育態度と子どもの行動傾向の関連を調べ、考察を行った。その結果、権威主義的態度およびネグレクト型態度において注意の問題、攻撃的行動が他の養育態度よりも高い傾向がみられた。ただし、因果関係に関しては、本研究の結果からは分からないため、

可能性について検討するのみに留まった。今後は、縦断的調査を行い、養育態度および子どもの行動特性がどのように変容していくのか、あるいはしないのかをチェックし、詳細に検討していく必要があると思われる。

## 引用文献

- 1) Lee Shawna J., Grogan-Kaylor Andrew, Berger Lawrence M. (2014) "Parental spanking of 1-year-old children and subsequent child protective services involvement", *Child Abuse & Neglect* **38**, 875-883 <https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2014.01.018>
- 2) 浦山 晶美、西村 真実子 (2009) 「母親の内的ワーキングモデルと虐待的な養育態度の関連性」『日本公衆衛生雑誌』 **56**, 223-231 [https://doi.org/10.11236/jph.56.4\\_223](https://doi.org/10.11236/jph.56.4_223)
- 3) 友田 明美 (2016) 「被虐待者の脳科学研究」『児童青年精神医学とその近接領域』 **57**, 719-729 [https://doi.org/10.20615/jscap.57.5\\_719](https://doi.org/10.20615/jscap.57.5_719)
- 4) 蒲谷 模介 (2013) 「前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答 母親の内的作業モデルおよび乳児の気質との関連」『発達心理学研究』 **24**, 507-517 <https://doi.org/10.11201/jjdp.24.507>
- 5) Cohn Deborah A., Patterson Charlotte J., Christopoulos Christina (1991) "The Family and Children's Peer Relations", *Journal of Social & Personal Relationships* **8**, 315-346 <https://doi.org/10.1177/0265407591083002>
- 6) 篠原 郁子 (2015) 「Sensitivityの派生概念と子どもの社会的発達—アタッチメント研究からの展望—」『心理学評論』 **58**, 506-529 [https://doi.org/10.24602/sjpr.58.4\\_506](https://doi.org/10.24602/sjpr.58.4_506)
- 7) Halligan Sarah L., Cooper Peter J., Fearon Pasco, Wheeler Sarah L., Crosby Michelle, Murray Lynne (2013) "The longitudinal development of emotion regulation capacities in children at risk for externalizing disorders", *Development and Psychopathology* **25**, 391-406 <https://doi.org/10.1017/S0954579412001137>
- 8) 数井 みゆき、遠藤 利彦、田中 亜希子、坂上 裕子、菅沼 真樹 (2000) 「日本人母子における愛着の世代間伝達」『教育心理学研究』 **48**, 323-332 [https://doi.org/10.5926/jjep1953.48.3\\_323](https://doi.org/10.5926/jjep1953.48.3_323)
- 9) Baumrind Diana (1966) "EFFECTS OF AUTHORITATIVE PARENTAL CONTROL ON CHILD BEHAVIOR", *Child Development* **37**, 887-907 <https://doi.org/10.2307/1126611>
- 10) Baumrind Diana (1967) "Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior", *Genetic Psychology Monographs* **75**, 43-88
- 11) Baumrind Diana (1971) "Current patterns of parental authority", *Developmental Psychology* **4**, 1-103 <https://doi.org/10.1037/h0030372>
- 12) 中道 圭人、中澤 潤 (2003) 「父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連」『千葉大学教育学部研究紀要』 **51**, 173-179
- 13) Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the Context of the Family: Parent-Child Interaction. In P. H. Mussen, & E. M. Hetherington (Eds.), *Handbook of Child Psychology: Vol. 4. Socialization, Personality, and Social Development*, New York, Wiley, 1-101
- 14) Lamborn Susie D., Mounts Nina S., Steinberg Laurence, Dornbusch Sanford M. (1991) "Patterns of Competence and Adjustment among Adolescents from Authoritative, Authoritarian, Indulgent, and Neglectful Families", *Child Development* **62**, 1049 <https://doi.org/10.2307/1131151>
- 15) 平田 裕美 (2018) 「父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成」『心理学

- 研究』89、221-228 <https://doi.org/10.4992/jipsy.89.16071>
- 16) 小高 恵 (1994)「親子関係と人格要因との関連性についての一考察」『性格心理学』研究 2、47-55 [https://doi.org/10.2132/jipjspp.2.1\\_47](https://doi.org/10.2132/jipjspp.2.1_47)
  - 17) 津守 真、磯部 景子、横山 峰子、下坂 雅子、仁科 弥生、長塚 和弥 (1961)「親子関係と幼児のパーソナリティの発達」『教育心理学研究』9、129-145.186 [https://doi.org/10.5926/jjep1953.9.3\\_129](https://doi.org/10.5926/jjep1953.9.3_129)
  - 18) 戸田 須恵子 (1998)「母親の養育スタイルと子どもの攻撃的行動に関する研究」『北海道教育大学紀要 第1部 C 教育科学編』48、49-62
  - 19) 首藤 敏元 (1985)「幼児の愛他行動に及ぼす理由づけの効果」『教育心理学研究』33、243-247
  - 20) 金子 劭榮、新瀬 和夫 (2002)「小学生の向社会性と親の養育態度」『金沢大学教育学部紀要.教育科学編』51、145-158
  - 21) Fromm Erich (1941) *Escape from Freedom.*, Holt, Reinhort & Winston. (フロム (1952)『自由からの逃走』日高六郎訳、東京創元社)
  - 22) Adorno T. W., Frenkel-Brunswik E., Levinson D. J., Sanford R. N. (1950) *The Authoritarian Personality.* (アドルノ (1980)『権威主義的パーソナリティ』田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳、青木書店)
  - 23) 善明 宣夫 (1989)「独断主義に関する心理学的研究」『人文論究』39、57-69
  - 24) Rokeach Milton, Fruchter Benjamin (1956) "A FACTORIAL STUDY OF DOGMATISM AND RELATED CONCEPTS", *Journal of Abnormal & Social Psychology* 53、356-360 <https://doi.org/10.1037/h0042069>
  - 25) 白銀 夏樹 (2015)「アドルノ教育論の社会心理学的基盤：自我形成をめぐる問題に焦点を当てて」『教職教育研究』20、45 - 61
  - 26) 荒木 義修 (2003)「権威主義的パーソナリティ、幼児虐待、世代間連鎖」『法政論叢』40、58-65 [https://doi.org/10.20816/jalps.40.1\\_58](https://doi.org/10.20816/jalps.40.1_58)
  - 27) 向田 久美子 (1997)「大学生の偏見と親の偏見の関連について」『性格心理学研究』5、56-57 [https://doi.org/10.2132/jipjspp.5.1\\_56](https://doi.org/10.2132/jipjspp.5.1_56)
  - 28) 敷島 千鶴、安藤 寿康、山形 伸二、尾崎 幸謙、高橋 雄介、野中 浩一 (2008)「権威主義的伝統主義の家族内伝達—遺伝か文化伝達か—」『理論と方法』23、2 105-126 [https://doi.org/10.11218/ojjams.23.2\\_105](https://doi.org/10.11218/ojjams.23.2_105)
  - 29) 佐藤 鮎美、内山 伊知郎 (2012)「乳児期における絵本共有が子どもに対する母親の働きかけに及ぼす効果：絵本共有時間を増加させる介入による縦断的研究から」『発達心理学研究』23、170-179 <https://doi.org/10.11201/jjdp.23.170>
  - 30) 楠本 洋子 (2019)「母親の「親育ち」が養育態度に及ぼす影響」『保育学研究』57、114-125 [https://doi.org/10.20617/reccej.57.1\\_114](https://doi.org/10.20617/reccej.57.1_114)
  - 31) 中島 香澄、芳川 玲子 (2001)「現代学生にみられる強迫的心性とその形成」『こころの健康』16、60-68 <https://doi.org/10.11383/kokoronokenkou1986.16.60>
  - 32) 任 玉洁、林 雅子 (2020)「親の養育態度が大学生の過剰適応に及ぼす影響—性差の視点から」『パーソナリティ研究』29、23-26 <https://doi.org/10.2132/personality.29.1.8>
  - 33) Rigby K., Slee P. T., Martin G. (2007) "Implications of Inadequate Parental Bonding and Peer Victimization for Adolescent Mental Health", *Journal of Adolescence* 30、801-812
  - 34) Chung Esther K., Gubernick Ruth S., LaNoue Marianna, Abatemarco Diane J. (2019) "Child Abuse and Neglect Risk Assessment: Quality Improvement in a Primary Care Setting", *Academic pediatrics* 19、227-235 <https://doi.org/10.1016/j.acap.2018.09.011>
  - 35) 鈴木 千琴 (2020)「幼児の排泄の自立に関する文献レビュー」『日本小児看護学会』29、192-200 [https://doi.org/10.20625/jschn.29\\_192](https://doi.org/10.20625/jschn.29_192)

- 36) 船曳 康子、村井 俊哉 (2017)「ASEBA行動チェックリスト (CBCL/1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>-5:保護者用およびC-TRF:保育士用) 標準値作成の試み」『児童青年精神医学とその近接領域』 **58**, 713-729 [https://doi.org/10.20615/jscap.58.5\\_713](https://doi.org/10.20615/jscap.58.5_713)
- 37) Achenbach T. M., Rescorla L. (2000) *Manual for the ASEBA Preschool Forms & Profiles*. University of Vermont, Research Center for Children, Youth, and Families.
- 38) Robinson Clyde C., Mandleco Barbara (1995) "Authoritative, authoritarian, and permissive parenting practices: Development of a new measure", *Psychological Reports* **77**, 819-830 <https://doi.org/10.2466/pr0.1995.77.3.819>
- 39) 坪井 裕子 (2005)「Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) による被虐待児の行動と情緒の特徴 児童養護施設における調査の検討」『教育心理学研究』 **53**, 110-121 [https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1\\_110](https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1_110)
- 40) 眞野 祥子、宇野 宏幸、堀内 史枝、西本 佳世子、高宮 静男 (2018)「注意欠如・多動症児の母親におけるマターナル・アタッチメントの特徴」『児童青年精神医学とその近接領域』 **59**, 614-630 [https://doi.org/10.20615/jscap.59.5\\_614](https://doi.org/10.20615/jscap.59.5_614)
- 41) 松岡 弥玲、岡田 涼、谷 伊織、大西 将史、中島 俊思、辻井 正次 (2011)「養育スタイル尺度の作成：発達的变化とADHD傾向との関連から」『発達心理学研究』 **22**, 179-188 <https://doi.org/10.11201/jjdp.22.179>
- 42) 溝川 藍、子安 増生 (2015)「他者理解と共感性の発達」『心理学評論』 **58**, 360-371 [https://doi.org/10.24602/sjpr.58.3\\_360](https://doi.org/10.24602/sjpr.58.3_360)
- 43) 小原 倫子 (2005)「母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連」『発達心理学研究』 **16**, 92-102 <https://doi.org/10.11201/jjdp.16.92>
- 44) 鈴木 亜由美、子安 増生、安 寧 (2004)「幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達：「心の理論」との関連から」『発達心理学研究』 **15**, 292-301 <https://doi.org/10.11201/jjdp.15.292>
- 45) Pears Katherine C., Moses Louis J. (2003) "Demographics, Parenting, and Theory of Mind in Preschool Children", *Social Development* **12**, 1-20 <https://doi.org/10.1111/1467-9507.00219>
- 46) 風間 みどり、平林 秀美、唐澤 真弓、Tardif Twila、Olson Sheryl (2013)「日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解：日米比較からの検討」『発達心理学研究』 **24**, 126-138 <https://doi.org/10.11201/jjdp.24.126>
- 47) 高島 恭子 (1970)「攻撃的行動の獲得機序に関する研究」『教育心理学研究』 **18**, 139-148 [https://doi.org/10.5926/jjep1953.18.3\\_139](https://doi.org/10.5926/jjep1953.18.3_139)